經濟論叢

第119巻　第4・5号

マクロ均衡と期待……瀬地山　敏　1

ホッブズの初期論説「トゥキュディデースの生涯と歴史」について……田中秀夫　20

資本制生産様式と人間自然・土地自然との関係……梅垣邦胤　41

純粋消費ローンモデルと世代間所得再分配……矢野秀利　60

独占資本主義下の恐慌（循環）の問題……渕上勇次郎　74

昭和52年4・5月

京都大學經濟學會

記 事 (経 済 学 会)

ヴェーラー教授の研究集会

大 野 英 二

ビーレフェルト大学歴史学部のハンス－ウルリヒ・ヴェーラー Hans-Ulrich Wehler 教授は，現在西ドイツにおける比較社会史研究の最も重要な推進者であるが，3月20日より4月2日までの2週間，京都大学創立七十周年記念後援会の招聘により来日した。

京都大学経済学会は，ドイツ現代史研究会，京都ドイツ文化センター，土地制度史学会近畿部会の協賛を得て，京大楽友会館において2回にわたって研究集会を開催した。

3月28日の研究集会のテーマは「ドイツ帝国主義1871—1918」(Zum deutschen Imperialismus von 1871–1918) であり，報告の中心をなしていたのは，ヴェーラー教授たちが，1960年代以来，伝統的な「外政の優位」(Primat der Außenpolitik) のパラディグマに代って，前面に押し出してきた新しいパラディグマであった。この第2のパラディグマは，工業化の影響，社会構造の変化，および社会政治上の操舵という3要因を結合する視座であり，経済と政治との媒介環としての社会の領域に特に止目している。こうして新たなパラディグマとの関連で，ヴェーラー教授は，帝国主義を正当化の戦略と支配の技術の側面から捉えて，社会帝国主義 Sozialimperialismus の概念を用いつつ，ドイツ帝国主義の諸局面を分析した。

3月30日の研究集会のテーマは「歴史と社会学」(Geschichte und Soziologie) であり，社会学と歴史学との学際的交流を進めてゆくうえで，問題となる方法的・理論的な諸論点，なかんずく歴史的時間の構造について報告がなされた。そのばあい，ヴェーラー教授は，エルンスト・ブロッホ Ernst Bloch の「非同時的存在の同時性」(Gleichzeitigkeit des Ungleichzeitigen) の視座を重視し，共時的比較のみでなく，通時的比較を進める必要があり，また，同種の現象よりも，むしろ機能上の等価物 (funktionelle Äquivalente) の比較を行なう必要があることを強調した。

参加者は，28日は57名，30日は64名であり，関西在住の研究者だけでなく，北海道や

沖縄をはじめ，遠隔地からの参加者も少なくなく，しかも，歴史学，法学，政治学，社会学，経済学，文学等のさまざまな専門の研究者が参加して，インテンシーフな討論が行なわれた。ヴェーラー教授がさいごに感想として述べたように，学問的領域で同じ問題関心をもつ研究者の間のコミュニティーの意義がまさに鮮明に示された研究集会であった。

なお，30日の研究集会の後で，ヴェーラー教授夫妻をはじめ，西ドイツの比較社会史研究の新鋭たるヴィンクラー Heinrich August Winkler 教授夫妻たちを囲んで立食パーティーが開催された。

さいごに，研究集会のおり通訳の労をとられた関西学院大学商学部の早島瑛教授のご尽力に謝意を表したく思う。